

2022

福島県現代詩集



福島県現代詩人会

赤松 幹彦

エピダウルスのメリナ・メルクーリ

一九八九年七月の夜、私は、アテネから一五三km離れたエピダウルスの野外劇場にいた。

ミューケナイの遺跡を見た後、エピダウルスの港に宿をとり、丘の上の松林に囲まれた野外劇場に向かった。その夜、アイスキュロスの「オレステウス三部作」が上演されることになっていた。

私は、前から七段目の中央に席をとった。開演の一時間前には、既に一万人を越える観衆が野外劇場を埋め尽くしていた。舞台周辺の動きが慌ただしさを増した頃、長身のサングラスの女性が現れた。メリナ・メルクーリである。文科相は一年前にやめていたが、会場のあちこちから湧き起こる拍手に手を振って応えた。その様子は、奔放な女優時代の華やきを思わせた。

彼女は、私の前の席に座った。サングラスをとると、知的な、端然とした眼差し、初老の女性だった。

テッサロニキから来た学生だという若い二人連れが私の隣に座った。彼らはギリシア悲劇を何も知らなかったが、それは能楽堂に来る日本の若者が「能」について何も知らないことと似ていた。

トロイ戦争のギリシア軍総大将アガメムノンの一族を襲った悲劇を、登場人物が出てくることに私は彼らに説明しなければならな

かった。私は中学校英語程度の表現力しかなかった。しかし、ときおり振り返って面白そうに微笑む前文科相の笑顔が「分かりやすい解説よ。もっと続けて」と言っていた。

深夜の一時半に劇は終わった。私は、一段降りて、秘書の若い女性と帰ろうとする元女優に話しかけた。昔、子供の頃に「日曜はだめよ」という映画を見たこと。お目にかかれたのはまるで奇跡だ。子供心に大きくなったらおんな正直で可愛い女性と、恋をしようと思った。

日本語なら到底言えない言葉が、外国語ならすらすら出てくるのである。

一九六二年の六月、私は故郷の小さな映画館で「日曜はだめよ」を見た。主人公の「イリア」は独立自主営業の売春婦だが、ギリシア悲劇の熱烈なファンでもある。日曜日には数十人の男たちとどんな騒ぎを演じ、「王女メデシア」を朗唱する。ただし、勝手に粗筋を替えてしまうのだが。彼女に「ギリシアの美」を見いだし恋をするアメリカ男が現れて港町は紛糾の嵐となる。メルクーリは、この映画で国際女優となり、やがて政治の世界に飛び込み、軍事政権を倒して長く文科相を務めた。

エピダウルスの夜から三十年余りの歳月が流れた。だが、そのときのことを思い出すと、今でも私の心に松林の夏の風音がよみがえるのである。

浅井 たけの

雪 虫

霜月に入り

「立冬」になった日の暖かい庭に出てみると

雪虫が小さな白綿を背負って

ふわり、と降ってきた。

季節を知らせる使者のように

毎年毎年この月になるとやってくる

それは亡き子の誕生月

逢えない子に逢えたような

庭に溢れる秋陽のやさしさが

雪虫の贈物であるかのように

私の魂を包んでいく。

「小雪」になって

真っ紅に染まった錦木ニシキギと満天星ドウダンツツジの葉

冷える朝毎に少しずつ

散らしていく季は静か。

この庭の

言葉なき小さなものたちの

生命をつなぐ物語

黒アゲハも塩辛トンボも

翅黒トンボや鬼ヤンマ、棲黒ヒヨウモン蝶と

蟬、そして雪虫も。

姿をみせることに生命をもやして

遠い息子と母を結ぶ見えない糸となり

節氣が移ろい逝く季節の道を

共に生きて歩いているのだと

物語る。

産み終えて逝くもの

亡骸を残して去るもの

再びと姿を見せぬもの

そして、生命を背負って降ってくるもの。

ジュリエットの家

イタリアのヴローナにある彼女の家は
日曜日とあって観光客で混雑していた
馬蹄形にくり抜かれた

分厚い入り口の門の壁には
恋の願いが叶うからと一面の落書き

それほど広くない中庭には
彼女のブロンズ像

右胸に触れば恋が成就し

左の胸に触れば財に恵まれるという
触られた部分の肌は金色に光っているが
変形し修理に出されることもあるらしい

像後方の壁には結ばれることを願い

カップルが掛けた南京錠

脇の壁に嵌め込まれた恋の悩みの手紙は
「ジュリエットの秘書」と呼ばれる

ポランティアによって回収され
各国語でそれぞれ返事が書かれるが
その数は年間約五千通にものぼるという

入場料を払えば建物の中で

彼女の着ていた衣裳や寝台も見られ

ロミオが忍んできたあのバルコニーにも
上がることができる

舞台のセットばかりでなく

「ロミオの家」「ジュリエットの墓」

彼女の誕生日まであり

ふたりが両家の確執に巻き込まれた

物語を現世に蘇らせたこの町

像の前で記念撮影を終え

右胸に触れていると

上衣の裾を引っ張る者がいるので

振り向くと

何時までやっているの

とでも言いたそうに

見馴れた顔が口を尖らしていた

あべ 和かこ

グラジオラス

令和という新しい元号になっても

三月十一日はやって来る

「命」の意味に想いを巡らす日

未踏の空からこぼれ落ちてくる天の声

海が見える貴女が住んだ小高い山には

朝焼けの空から山鳩たちの声が

山彦を重ねて降ってきた

私たち人間はいつからこの鳥たちが伝える

天の声が分からなくなったのだろうか

貴女が語り部のように幼い私に語った

掻い潜ってきた戦争という時空

歪んだ時空はそこに多くの人々を引きずり込み

狂気の悲しみを現実にした

長男を兵士として戦争で亡くし

引き揚げ者として着の身着のまま家族とともに

大きな海に抱かれた生まれ故郷に

たどり着いた貴女

小柄な身体を盾に死と隣り合わせの
色の無い時間を超えて来たのですね
空と繋がるその海から流れ来る
浜風に揺らぐ異国の薫り漂うグラジオラス

あのうだるような暑い夏の日

深紅のグラジオラスは紺碧の海に臨みながら

火焰のように咲いていた

現実と虚構の境を曖昧にして

海上の蜃気楼に炎が揺れる

ラジオから追悼のサイレンの音がした

黙祷をする貴女の眼から

止めどなく大粒の涙が溢れ出る

明治生れの気丈な貴女が

この涙に辿り着くまでに

どれくらい

打ち寄せる波の音を聞いたのですか

貴女が繋いだ「命」を受けて

私は故郷の海に詩を託す

故郷の海は

私に

「命」についての問いを投げかけてくる

春の詠 破綻調

黒い瞳の若者に

聡明な憧れをかたむけ

肩を組みあつた

ボクとあの日とうたごえ

物語りはモノクロから

フルカラーに

青春の一里塚を

染め抜いた

胸の奥の水の音を聴く

君が前髪を切ってから

視野は広がって

空が幾分高まり

そしてブレはじめた

だれも父さまに

告げ口などできない

君の額を統べる

光と風と物語の

アンハッピーエンド

春の痛みに

老いた娘と父さまよ

#ひとつで呼び出しても

しわ深いだけ

思慮にはうとい

ボクは平和のありがたさを

紙に刷り込むが

戦争を止める方法を

どこにも示せない

夜の襟足をかすめ

言葉の綾をつかれ

世界は過呼吸に陥る

液晶の画面が歪み

電線に繋がれた

ボクの茶の間に

ポリ袋を被せる

土ぼこりの匂いがして

街並みが崩れる

世界平和党

人間はいつまで地球で生活できるのか

明言してくれる人は居るのだろうか

誰ひとりとして 居ないだろう

現状のまま前に進んでゆけば地球は壊れてしまう

なんとかしなければ

三百年の時間をかけても生きる道を見つけなければ

これは日本のためだけでなく世界のためのアクション

本部地として北海道くらいの面積が必要となる

この地には世界平和をめざした人間だけが集まって

三百六十五日話し合いを続ける。最終的に五百万人の集合地

戦争は国を滅ぼし 人の心まで滅ぼし 地球を滅ぼす

無駄なアクションは 止めること

各国に生産できるものがあるので農業林業教育を主軸と

して世界二百カ国の人間が同じ方向をみつめて進む

世界平和をめざして党員は全身全霊で世界のため働く

地球温暖化は人間が自由気ままに地球に踏み込んだため
地球がかかった病気です

世界の人々へ

世界が現状だけのためのアクションを続けていくと

地球の寿命が 危ない

地球を大切に やさしく使わせてもらう

地球以外に人間が安住できる場所は無いのです

誰も止める人間がいらないとしても

宇宙にまで土足で踏み込まないで

きれいな星空が三百年後もみれるよう

二〇二二年一月末日

伊藤 俊晴

二〇二二北京冬季五輪

ロシアがウクライナを包囲している

二〇二二年二月の世界状況

あいかわらずの北朝鮮のミサイル発射実験

ロシア軍の十万人の軍隊演習は実習である

北方 中央 南方ルートからの包囲に

北京冬季五輪の期間 世界の目は両にらみ

フランスがロシア・中国を動き回っている

第二次世界大戦後の七十年

常任理事国五力国 英米仏中露の固定化

近年の北朝鮮に対する国連の無能さは

英米仏と中露の明確な対立による

国連における常任理事国の拒否権は不要だが

国連では解決できない次元に達している

オリンピック委員会（IOC）は

東京と同様北京でも猿回しをやっている

国連 IOC その他国際機関も再編すべき

北朝鮮 中国 ロシアが戦争を求めている

この世界状況の中で中国冬季五輪開催

コロナ対応バブル方式でも陽性者が出る

何回かの検査 陰性でも 陽性者が出る

コロナウイルスを完全に廃除できない

PCR検査の検査の問題ではなく

コロナウイルスとヒトとの問題である

今回の新型コロナ感染症（COVID-19）では

大変な迷惑をこうむった

スペイン風邪に次ぐ災難である

人生の下着

いいですかみなさん

学歴とは人生の下着ですよ

街を歩く人は

どんな下着を着ているのか判りません
着けていない人もいます

確かに街を歩くには

どうでもいいものです

ただ下着は

身なりをきちつとします

姿勢も保ちますし匂いも抑えます

人生の下着ですから

いいものを着けたいですよね

似合うもの褒められるもの

そのために頑張るわけです

ただね

あくまで下着ですから

下着のファッションショーも

若いうちだけで

いずれ上着のセンスが問われます

世の中どんなものでも

磨けば光りますが

人生の下着で磨くと

早くよく光ります

ネットコーヒー

インターネットを眺めながら

飲むホットコーヒー

甘い書き込みに苦みを感じ

臭い画像を香りでぼかす

うまいまずいではない

人生の眠気を

吹き飛ばしたいだけ

大山 いづみ

母を想う

壁にはしみがある

反抗期時代の私のころには
すべてが色あせてみえていた

悲しみに落ちた瞳は

自分さえ気にいらず

反発ばかりの あの時

何をどうしたいのかさえ

わからない孤独に

あえぎ 押しつぶされ

自分も突き放していた

母に反抗し こぼした珈琲のにじみ

そんな私に母は笑顔で

「どうしたんだ」と言った

気まずくて その場を後にした

振り返ると母が壁を拭いていた

ズキッと胸に痛みが走る
なのに 何も言わず逃げた

私としみが母を傷つけ

気づかぬふりの私にも傷が残った

自分が後悔の糸に絡まり苦しかったが

母は何も言わずいつもの母だった

「あの時はごめんなさい」と

いいそびれたままの心

今も駄目な自分がいて

時々深海に沈んでいく

ああ どうして私は と

弱き心が自己嫌悪にうな垂れる時

母の笑顔が私を助ける

私の中の私が

母のように笑って生きようよ

と 背中を押してくれる

実家に残るしみは

母が残した笑顔につつまれて

桂吊り橋

幼い手から

無骨な指が受け取る

綾取りのその都度変る形が

糸編みの橋になったり山になったり

子の心を読むこともできず

思索し子の目を見たり

たがいに交すことばの綾をとり合い

成長とたくましさを感じるようになる

ずい分来たなと思ひ子等も妻も身内も

うしろに続く気配さえうすくなる

自分だけの細い道あるいて来た

たち止って覗くと

きわ立つ崖の下は急流

しばらく見てためらう足をふみ出すと

目前のかずら吊り橋の

しつかりとした感触が足うらに伝わる

揺れがあつても手つたえに歩を進める

編みととのえられた桂の橋だ

白い急流の上をゆつくりと進む

あの日もあの時も友人もあの人にも

過ぎ去った小道の枝道の思い出も

橋の向こうに置いて渡る

渡り終えて振り向く

そして

振り向きざまに手にした鉋を振り上げ

切る 切る

桂吊り橋を切り落す

背後からの気配のないこと確め

白い靄の小道を一人

あゆむ心を

きめた

小林 真代

滝の坊坂

狭くて急な滝の坊坂

ゆらゆら下ってだるい足

なおだらだらと下れば肩が凝る

坂の真ん中あたり

女が険しい顔で

いつもいつも草を筆っていた

小さな庭の小さな家が

解体されてゆく

あのあたりに井戸があつた

と思うところが二カ所

坂の下井戸は数年前にしまわれて

井戸に寄り添うように立っていた

彫りかけの観音様も消えた

もう一つの井戸は

震災のとき近隣の人々に水を分けて

そののちは知らない

いまも坂の途中のどこかにあるはず

坂の辺の家はいつもどこか湿っていて

同じにおいがする

水は水を目指すということ

どんなに土を盛り石で塞いでも

埋め戻し、解体、といくつ言葉を重ねても

滝の坊坂下る水は

御厩稲荷をくすぐって夏井川まで

流れ続ける、落ち続ける

いつか

草を筆っていた女がふいと顔を上げて

通りすがりのわたしに

あんた、昼ごはん、何すんの、と訊いた

重たい首を回しバキバキ骨を鳴らし

草を掴んだ手を垂らしたまま汗も拭わず

わたしはなんと答えたのだったか

滝の坊坂だくだくだり

流れてゆく、落ちてゆく

まんだまんだあな

まんだ解除が見えない帰還困難区域は
いつか風がセピア色だ
椿の実を拾った氏神様に吹いて
登窯の辺りに吹いて
神々様が出雲に出立して
お帰りになる門口に彷徨う
私は心の栄養という思い出を食べて
セピアの風を呼吸する

花がセイダカアワダチソウに追われて
記憶のアルバムが
セピアの風景を吹き抜ける里は
墓参の百日草だけが朱い
命日に合わせて咲かせた朱が
仏様より自分の心を優しく満たして
空に家紋のアゲハチョウが舞って消えた
母の夏が逝く墓標に
今年もアキアカネは来ないだろう
田んぼが雑木林になり
ヤゴの家系が途切れっちまって

生態系が変遷する

えっぺ紡がれて来た愛

積み重なる愛の歴史は除染されて

「除染土運搬専用車」 大型トラックが

びゅんぶゅんあぶねえごと

肥沃な黒い土もいっしょくただ

豊かだった大地をブルトローザが鳴る

堆積した縄文からの文化が

黒いフレコンバックの中で窒息していた

野菊の群れる林

スケッチした高瀬川溪谷

わたしの詩の森を

いつか人は当たり前前に被爆の森と呼ぶ

天空だけはいつも清いふるさと

セピアの風にお線香が乱舞する

大学教授様ご一行がやって来て

牧場の牛が8頭解体された

従兄が薬殺できなかったベコたちは

臓物が切り刻まれ研究室に運ばれた

神々の帰還をおも念う祈りのかたちで

掌に朱色の愛を包む

セピアな里帰りの帰り道

心のことはまんだまんだあな

斎藤 久夫

高瀬川変奏曲

バリケードを密かに抜けると

そこは 高瀬川の溪谷である

大堀・小丸・神鳴と
おまる かんなり

地図には その名で記される溪谷

川下の中州にはだんぶの花が咲き

夏の夕暮れ 白波に鮎釣りの浮子を流し
うき

つばの破れた帽子で水を掬った

大堀村に疎開した大木惇夫が残した

／だんぶ花^{ばな}くれなる悲し／溪谷を背にして

神鳴に建つ 「高瀬川哀吟」の詩碑

小丸にある小丸の表札 家の入口の鎮魂の碑

南の島で少佐が アムール川の地で弟が戦死
建立小丸哲也とタケ 青年らは死し 何処に

小丸の人らは逃げたか 黒揚羽が舞いさらに

なお上下に舞い庭の上空へ飛び去っていった

小丸の杣道^{そまみち}を越えれば 南北に分かれて

人々が激しく争った地 棚塩^{たなしお} 浪江小高

幻の福島第三原子力発電所が見えるだろう

海底のプレートが弾けて 巨大津波の惨劇が

東日本太平洋沿岸を襲った 東南東へ十キロ

白い爆発が福島第一原発原子炉建屋で起きた

あれから十年あれからもう十年

追われた人たちは何処へ行った

厳しく侵入者の立ち入りを拒む高度汚染区域

北西に流れた雪雲^{ブルーム} 彷徨^{さまよ}う揚羽黒揚羽よ

流れつづける 溪流の岩陰を

山女魚はきつと 泳いでいるよ

神鳴の淵の碧瑠璃^{へきるり}に きつと

岩魚は 黝^{くろ}い影を映しているよ

低くひくく私は口吟^{くさ}む高瀬川変奏曲

遠い村まで

もしも戻れるのなら

いくつも山々を越えて

あの遠い川まで

わたしを連れていってください。

村を流れるひとすじの川。

とうに日が暮れるまで

なにを夢みていたのでしょうか。

水のおもてには

暮らした歳月のうたかたが

まぼろしのように浮かんでは消えています。

懐かしい影を踏みながら

きょうは傍らに寝そべって遊びましょう。

鳥を追ったり、魚を掬ったりして。

もしも戻れるのなら

いくつも夕焼けを背負って

あの遠い海まで

わたしを連れていってください。

海へ流れる夕日から

思い出を残らず拾い集めましょう。

そして、花を供えましょう

顔は泥にまみれて

ぬけがらをいくら探しても

あなたはどこにもいません。

春になれば

れんぎょう、こぶし、もくれんのはな

母屋も土蔵も匂い立って

田には水を引きましょう。

もしも戻れるのなら

避難を強いられたふるさとの

あの遠い村まで

わたしを連れていってください。

自分一人の体でないと言うことは

「避難してください」って言われて
一番困ったことは、母ちゃんだった

あの頃、紙おむつが無くってね
半分に切って使ったりしていた
どうしようもなくって

民生委員さんに電話したら
支援物資に紙おむつも入っているはず
探して、四袋も持ってきてもらった
いや、あの時は、ありがたかった
本当に、ありがたかった
あの時の事は忘れられない

自分一人の体でないと言うことは
これには

どうにも難しい所がある
歩がえる人でもないし
言ってわかる人でもない
体育館に避難したら
親戚の所に来たらと
声かけられたけど

氣い遣うのよ

うん

その

おむつ交換する時などね

まあ

やつぱり

耐えられないよね

そのうち

仮設にと声かけられたけど

ベニヤ板一枚

母ちゃん、レビー小体型認知症で騒ぐんだわ
隣に迷惑かかるし、本当に困ったの

なんだ

かんだ

いろいろあつて

今の家、二十五年も使っていなかったの
かび臭い、埃もある、何とか掃除して
やっと住まえるようになって
母ちゃんと二人で避難したの

本当に

母一人、子一人

要介護なんて言う人は

今回の避難は

なんぼ、苦勞したかわからないと思うよ

澤 夏子

病床にて

2021年夏の終りに心不全にて入院を
余儀なくされ信夫山を見つめながら
約一か月院内生活を送った時の詩

ベットから起きて

信夫山を見つめて過ごす。

右まわりに

大きく回わる渦に

今日も吸い込まれていく。

感情は乏しくなり

驚くことも無くなった。

堀辰雄の“風たちぬ”の

菜穂子もこうして

八ヶ岳を見て

過ごしていたのだろうか・・・

ベットに寝ては

頭のうしろに手を組んで

白い天井を見つめながら

今は諦めと心に言い聞かせ

なぜと言う過去と

これからと言う未来しか

浮ばない日が続く。

手を眺めて哀れむより

どうにでもなれと

開き直って

右足と左足の裏を

くっ付け揉んで

病気回復と

早く家に帰れますようにと

祈る。

病床では

わずかな希望と

虚しい時間が

右まわりに

大きく回わる渦に

今日も吸い込まれていく。

時は人を待たず、暗澹たる世界に毎日引き摺り
込まれ苦悩した日々を振り返ると、退院してみ
て、我家で生活する安らぎの有り難さを沁々と
感じる。 合掌。

鈴木 淑子

シャガールの花嫁

あの人は 花束とともに

同時代を生きた同胞らを抱きしめて

シャガールの絵のように

衣装の裾をなびかせながら 空を飛んでいった

手を取りあう同胞は

青い影のように淡く寄り添い

胸に抱いた花束は

さりげなく白い花びらを散らし

しだいに蒼穹の奥に惹きこまれていった

飛びゆくあの人の裳裾は

キラキラと光彩を放ち 網目のように地上に広がり

絹の帳のように地上を抱いて

心通うものたちを 揺らめきながら曳いていった

時という限りの中で

命あるかぎり愛して生きた同胞たちよ

同じ世代で 同じ空気を吸い

同じ貧しさを分け合い

等しく辛酸を嘗めあつた彼ら

飛び立つ前に遺すものは

「さようなら」 だけでいいのだろうか

顎を上げ背筋を伸ばし

樫の木のように

風雪に耐えて培った力を

命ある限り残していこう

あの戦後の貧しくひもじい時代を

青春の黄金時代に変えたように

次の命も豊かであるように

けれども 力尽きた人は

あの人に抱かれて 蒼穹を目指すがいい

シャガールの花嫁のように

本が見つからない

本が見つからない

かつては本棚の

どの段の右から何番目に

その本があると

ちゃんと覚えていたのに

本が見つからない

田舎の町の小さな書店の文庫本は

シンチョウとカドカワと

そして少しのイワナミと

どこにジイドがありヘッセがあるかを

すべて諳んじていたはずなのに

本が見つからない

かつての書齋は

やがて娘の部屋となり

今では孫の寝室となり

愛書たちは

奥へ奥へと追いやられ

本が見つからない

国文・中文・外文と

詩・小説・短歌諸々と

ちゃんと分類して

それらはあつたはずなのに

あなたが見つからない

かつてあなたはあんなに若々しく

澁刺として輝いていたはずなのに

そしてわたしも

あんなにも夢多く

春秋に富んでいたはずなのに

本が見つからない

本が見つからない

空野 禪

風と女性

山のとつぺんを

滑るように雲が流れている

風の袋を抱えた風神が

少しずつ風を送り出しているのだろうか

春の風

夏の風

秋の風

冬の風

季節ごとに香りが違う

音が違う

感触が違う

三・二一の風は

私の心からっ風

大地が割れ

真つ黒い雲が空を覆い

冷たい雨が刺さるように降っていた

あの日――

怯えた形相で地面にペタンと

座り込んでいた女性

繰り返し押し寄せる余震に

束ねた髪は乱れ

両腕の中には

しっかりと孫を抱き寄せていた

周り灯籠のように

何遍もやってくる

ひとつの光景

闇の中だというのに

そこだけが光って

恐怖の中に愛を見せつける

「もういいかい」

「まーただよ」

記憶の中のかくれんぼ

高橋 美加子

いのち

満ちて

欠けて

月

満ちて

引いて

潮

波はいのちを砕き

そのかけらで

この小さな列島のぐるりを取りかこむ

だれもしらない

砕かれた

いのちの

かけらが

闇に

眠り

時の

うねりで

つなぎ

あわさり

足早に

朝の

道で

すれ違っているのを

日本モデルという事

二〇二〇年四月に安倍晋三内閣総理大臣は

新型コロナウイルスの感染の広がりを防ぐため

緊急事態宣言を発出した

諸外国はその頃法的な強制力を伴う

都市封鎖を実行していた

日本政府は法的強制はできない、とし

その時「日本モデル」という、余り注目はされなかった

発想で罰則を伴わない「要請」をした

日本国民は抵抗なくそれに従った

欧米を含め諸外国は驚愕した

自粛という大規模な私権の制限の「要請」を

日本では国民が抵抗する事もなく受け入れるのだと

国民的危機意識の「空気」の中で

日本国民は政府の要請に一斉に従った

「日本モデル」を可能にする政治・文化は

日本独特のものなのか

それは伝統的文化のしからしむところであり

国民を支配する「空気」の微妙な力のなせる業である

日本では天皇制の存在が政治の安定を醸し出している

それは、政治・文化の「空気」をつくる伝統の力である

しかし、その一方でその伝統が全体主義的思考を

醸し出してしまわないだろうか

「日本モデル」は民主的であると同時に

全体主義を助成する力にもなる

自粛の名の元の要請は永続きは難しい

補償があるとはいえ、その為に絶望し、泣き寝入りし

いじめに会う人々がいる事を忘れてはならない

世界中がこうむっているコロナ禍の中で

その闘い方でそれぞれの国の性格が注目されている

東日本大震災の時も「日本モデル」で切り抜けた

暴動も起きず、物資をめぐる紛糾もなかった

危機的状況での「日本モデル」は、これからも

人々の犠牲があつて繰り返されるのだろうか

焰

遠くで 花火の音がする

コロナ禍の中で 十歳上の姉が旅立った

別れの言葉も交わせぬ 悲しみに

夕闇せまる部屋で 古い燭台を持ち出し

蠟燭に 灯を点す

点されるままに燃え出す 焰の潔さ

青さを含んだ焰は ゆるやかに燃え上り

何かに向かって 懸命に歩み出す

時に苦しげに 喘ぎ 揺らめいては立ち上りながら

いつしか 自からの姿を象っている

そこには 強い意思と孤独が込められていて

やがて滅びゆくその移ろいを 照らし続けている

それはひたむきで純粹に生きた姉の姿と重なり

見つめる私の心が 疼く

一瞬 焰の中に流れる時間を手繰りよせると
優しかった姉の笑顔が目裏を過ぎった

風もないのに 突然燭台がカタリと揺れた
焰が激しく燃え上り オレンジ色に光耀き
ひとしき 青色との光彩の競演を繰り広げると
夕闇の中に 輪郭が静かに溶けこんでゆく
次第にいのちの焰が 暗闇にのみ込まれてゆく
遠くで 花火の音がする

寒夜

冬至を過ぎ 入日は遅くなっても

日の出の遅い寒夜が続く

夜明けは星も凍えている

人は苦しいとき 知らないで手を合わせる

手を合わせなければ

越えられない日々がある

その時 何に向かつて

手を合わせていたか

そのような日のあること あつたこと

簡単や楽を選んでいては

感覚まで操られはしないか

手を合わせることを忘れてはいないか

忘れてよいのか

寒夜が好きだ

寒夜のような厳しさが好きだ

祈ることを教えてくれるからだ

命がけ厳しさのない生活は味気ない
無意味とさえ思う

「祈りとはそれが原点ということではないのか
古里であり ひ弱さ 貧しさを知るということ
なかこころ
中心ということ

何をするか 何をしていけないか

古里を汚してはいないか 偽ってはいないか」

明けの星

明けの星は まだ暗い寒夜に
起きて働くものの額に輝く星である

独立独歩迷惑をかけず

自信をもって生きるためには

苦勞は必要のものと分かっているのだ

その星の名は知らずとも

心に刻まれた知己ちきの星なのだ

新しい物語

若草色の表紙をめくり

あなたの 新しい物語を読む

落ち葉を巻き上げ飛ぶ列車に運ばれて

その日のうちの手術台

まばゆいライトも瞼には残っていない

目覚めれば身を固められたICUという密室

自由をはく奪された永遠の一週間 やがて

雲間から顔出す太陽が凍てつく氷を解かすよう

ひとりトイレに行け 流れる水で手も顔も洗え

新しい心臓の 新しい鼓動

ジングルベルは私のために歌われて

故郷の家の食卓が待っていたと

デスクに沈み 道の端にうずくまり

背中に張り付く計器のバッグの重さ

緊急対応依頼マークカードの年中無休に

自立という答えの見えなかったストーリー

灰色表紙の最終章はついに訪れて

合う臓器いただきました 新しい物語

不具合なパーツ外し 適合する部品を当てはめて

導線をつなぎスイッチを入れれば 即機能かと

読者の予想は甘すぎて

急性期の拒絶反応 警戒態勢

免疫抑制剤の連続投与

神経がまだ つながっていません

脈はなかなかあがりません

血圧だけは 跳ね上がります

リハビリの戦い始まる 物語

あなたは答えた「大丈夫です」

空の果てまで 夢が広がる新しいストーリー

走る夢 泳ぐ夢 サーフィンに挑む夢

一章は 運転免許取得 一人で出かける章

二章には リモート勤務 初サラリーの物語

序章には 感謝 あなたの心臓を 生き切ります

負い目を背負ってきた父さん母さんありがとうと

私はあなたの新しい物語の愛読者です

浜津 澄男

蛙

蒼白い月の光

ネオンが揺れる池の畔で

蛙が悲しげに鳴いている

葉かげに潜んで

赤い油を見つめている

この街はずれ

すっかり静かになって

蛙だけが鳴いている

黒い水面が小さく揺れて

真っ赤なネオンが、ぎらついている

ふらふらと赤い舌が揺れて

醜く、からみ合っているような

そんな、なか

蛙は腹を膨らして鳴いている

哀れにも小さな体

ぴよん　ぴよんと石をつたいて

藪のかげを泳いで行く

独楽回しの風景

幼い頃母に叱られると

僕は農家の板敷きり居間で独楽を回した

病床の母は僕の独楽遊びが好きだった

独楽を回すと板敷きの居間は

母の病気を断ち切るような

振動の音で満ちていた

紐から離れて回転するその独楽を

母は楽しそうに眺めていた

健康に流れる血のような

心地よい独楽の振動が

母の体内の血に伝わっていたのだろう

子ども心にそれが嬉しくて

僕は何度も独楽を回した

紐から離れた独楽が

自力で立って回転するのを

僕の未来に重ねて

母は回転する数だけ

僕を案じていたのだろう

あの時重く病んだ母は

独楽の回転の数だけ
涙を流していた

赤トンボ

日暮れの蜻蛉は群れをなして飛んでいた
飛行を楽しむ家族のように

上になり下になり南天の葉先に止まると
薄い羽根は照り返しの陽で美しかった

僕が捕らえて少女にやると

少女は細い指先で羽根をふたつに揃え
綺麗と言って赤トンボを逃がしてやった

あの時少女はなぜか南天の赤い実の
小枝を両手に持っていた

そして飛び交う秋のトンボを見ながら
私もあの羽根で飛んで見たいと言った
なぜに脆弱な羽根が欲しいのか

少年の僕にも分かっていた

あの時少女は夏に母を亡くしていた

僕も淋しい夕暮れの空を翔んで見たかった

僕も秋に母を亡くしていた

南天の実が血のように赤かった

福西 トモ子

花筏

戊辰戦争の会津の悲劇を見てきた

鶴ヶ城の桜たち

栄華のはかなさを語るように

花の季節に咲き誇る

それはひととき

無情の風が花を散らして

花びらは城いちめんを覆い

やがて 内堀から外堀へと

美しい花筏となって

流れてゆく

おそらく 歴史のなかの人達も

花の季節にはこの風情に

心癒されていたのであろうと

想いをめぐらし

私ははやる心をときめかして

そのなかを歩く

花筏は会津の歴史を

一枚の絵に織りながら

今年もゆるやかに流れていく

象徴

フランス語のシンボリックを
兆民は「象徴」と訳した
十九世紀末の
ヨーロッパで起きた象徴派は
情緒を象徴によって表現しようとする
詩運動の一派だが
若い頃に、ぼくらの世代は
マラルメやリルケを通して
一通りは喰つかじった

今どき、シンボリズムもないが
あることを表す記号的な
感性的形象としての
シンボリズムを
例えば、アベノミクスは
アベノマスクに
あるいは政権が官僚の
人事権を握って私物化し
モリカケ付度で人を殺して
それを認諾で消去することなど

マキャヴェッリの知性の
「象徴」である

それを異様とも
わが国の民主主義を謳う憲法の
精神の危機とも
思わなくなっているこの国は
何を 未来のシンボライズに
するのだろうか？

年寄りが死んで また一つ
臨界点に達した村が消える
消える村の鎮守の森から
棲みついていた八百万の神が
群れをなして飛び去る

昭和、平成、令和と
教科書の墨塗りを体験して生きた
ぼくらの世代は
もうこの世にはいくらもない
虎の威を借る狐の価値観を
この国の国是と思い込む
ネット社会の若者たち
そのシンボルは金（マネー）か

松坂 佳生

清明

北の方角からとめどなく

機関車のような北風が

鉄や鉛のような重さで

人間の住んでいる

平地や山地一帯を吹き廻り

人間の生活を押しつぶす

純白で冷たい相棒と

共に暴れて

人間の心や体を凍らせる

自然の力がグラデーションのように

進み 動きだす

暦のページを捲る時がきた

神がゆつくりと 暦を捲りだし
両手を一回叩くと

大気から桃色の息吹が飛び出し

自然の彩が薄若葉色に染まり

小枝の先に芽が産まれる

寒さが固くなっていた心に

光と風が春の音を鳴らし始めた

人間のイノベーションが進み始める

(清明は二十四節気の一つ)

彼コロナウィルスの顔

地球上のもっとも小さい生物

彼の名は濾過性病原体 またの名はウィルス

彼はじつと見つめている

侵入のため隙を狙って身構えている

固有の生命のプログラムを持ち

隙を窺って見つめている

彼は変異という驚くべき能力を持ち

まるでルールのない勢いで子孫を増殖する

多細胞という構造と性質を持たない彼

天性の生物の情報を持たない彼

彼の待ちに待った宿主への侵入

彼は疑似子孫繁栄の使命を果たすために

巧妙な手段で侵略は始める

別の生き物の体内に入り込んで

増殖するすべしかない 単細胞の生き物

感染という手を借りて 増殖する自然宿主

長い長い間 この機会を狙っていた

苦もなく宿主に出会えた彼は

速度を早め 細胞の中に侵入し子孫作りに取り掛かる

身を沈めた細胞の蛋白質合成装置を奪い

細胞の心と顔に親しげに近付き 拒絶されることなく

その日その時から意図した蛋白質を作りはじめる

細胞融合をした細胞は強かに共存共栄を迫る

それほど遠くない潜伏期間が過ぎ

彼の周到な手段どおり現実に姿を現す

発熱、上気道炎、エマージングウイルス

満足した顔が見える

人間は黙っていることはない

放った対抗する抗体が

新たに刺客となって宿主の子孫と対峙する

個の穏やかな生を守るために両手を広げ

集団の生きていく社会機能を守るために両手を掲げる

陰の存在が化身となって歩みを止める

だが、彼も新たな侵略政策を用意しているだろう

室井 大和

霧幻地蔵

川の流に沿って

霧が流れていく

溪谷も森も隠す霧の海

光の粒が透ける

川面に緑が投影する只見川

小舟が一艘進んでいく

狭霧を切る風

水蒸気が山に空に拡散する

船着場の軋む音

右手に霧幻地蔵

左手に子安観音

川の安全と出産の無事を祈ったのだろう

野の花が咲いている

だれもない道

古民家があった

訪いをして　だれもない

おそるおそる板戸を開けると

がらんとした空間

土間にぽつんと木の実があった

洪水があった

人災があった

人が住めなくなつた

むかし　この集落には　硫黄鉾山跡があった

露天掘り　地下掘りで　掘り尽した

地盤が脆弱となつた

豪雨があった

ブナ坂崩れが起つた

人も家畜も移住した

霧幻峡の行く先は

廃村　いな　かけがえのない村

すべて霧の中

石の地蔵さんが知っている

ああ　夢幻峡

タダの野菜

猛暑でばれいしょが

5割高になったとテレビや新聞が報じている

災害で玉ねぎが

4割高だと東京の知人から電話がくる

跡取りがないからだとか

猫の目農政だからだとか姦しい

うちでは四季を通じて年中

野菜を作っているが値段など眼中にない

作付けの時から

これは娘や孫用だとか

これは友達に上げるものだとか

これは庄屋に届けるものだとか考えて作る

不思議なもので野菜達は

のちのち必ず笑顔で帰ってくる

一粒の米

キッチンやリビングに落ちている

一粒の米はピカピカ光っている

だから足で踏んだり

けったりした事も一度もない

掃除機を掛けて吸い取ることもした事が無い

わずか3ミリの大きさで

銀めしと言われ続けてきた所以よ

約一万年前の縄文時代から

人間の胃袋を満たしてきた一粒よ

時代が変わって肉が主食になっても

一粒の光は増している

飢餓の子供たちを

真っ先に救ってくれている

一粒の光よ 輝きよ

若杉 縷縷

一喝

男 八十路すぎて減らず口自省心乏しさ悲し

わたなべ えいこ

記憶の断片

銀世界の風景は薄墨の中に広がる

水郡線を走る列車の車窓から

すっかり旅人に成り切って

流れる風や山 家に視線を注いでいた

これから足を踏み入れる山峡の宿*

どんなふうにして予約を取ったのか

どこの駅で下車したのかも

すっかり忘れている

狭いくねくね道を

タクシーに乗ってその日の宿に

山の中腹にあったのかも知れない

カーテンの向かい側には

真っ白な雪に包まれた山が見えた

湯治場だったのだろう

湯船につかっていたおばさん達がいて

若いのにどこ悪いのと

声を掛けられた

二十歳はたちくらいだった

別に心が病んでいたわけでもなかった

硫酸塩泉の湯が

身体を温めていた

五十年前も昔の出来事が

雪が舞うように思いだされる

このごろ

*二岐温泉
ふたまた

福島県南西部二岐山山麓にある温泉
泉質は硫酸塩泉

渡辺 孝行

ゲンザイ

あるべくなしえなかった

ことの記憶

としての ゲンザイ

書く

書き残す

記録する

浅くも 深くも

小事も 大事も

あるべく なるべく

日常の

精事に

普遍する ゲンザイ

未然ゆえに

繰り返されるを

異議なしとせざるか

その煩を厭うな

書き出せ

果たすべく

紛れなく

誠実に

生きるべく

書くこと

書き残すこと

文字にすること

失われた時を

求める方へ

見出される方へ

人間の

あるべき歩みの

ゲンザイの方へ

渡辺 由和

柿の木

娘が生まれれば桐を植え

位牌持ちが出来れば柿の木を植え

繋がって来た村

夏は広葉の緑陰に涼もり

葉を落とせば縁側は陽だまりで

実はもぎ日干しにして蓄えた柿の木

季節が来れば葉を広げ

実をつけ二代三代

家督を見守ってきた柿の木

蓄える事もなくなり

熟しても鳥さえついばまない

朽ち始めた家の建て替えで

柿の木を切った

土が入れ替えられ

整った庭に残る切り株

代を重ね繋がってきた村は

藁葺きの家も柿の木の簀えも

ランドセルを背負う子も見えなくなった

嫁を迎えれば位牌持ちは街にでて

継ぐものも見えない

芽吹きの子節がきて

赤茶の木汁を流す切り株

ヒコバエが数本芽吹いている

葉擦れのしない風の夜

切り株が唸り

ヒコバエの震える音を聞く

編集後記

今回の福島県現代詩集2022を発行するに当たり、二〇二一年一〇月初旬、会津地区会員の「伊藤俊晴、岩田武昭、細谷節子、福西トモ子」の四人が、(医) いう子どもクリニックスに集合して話し合った。

その結果、常任理事の伊藤が、昨年の八月に福島県文化振興基金助成の申請を提出しており、過去二回当会の詩集編集委員長を務めており、今回の適任として、編集委員長に決まった。

二〇二一年一〇月中旬までには、会員及び会員以外の投稿予定者(岩田理事長が選定)への原稿募集案内を送った。原稿締め切りは例年通り、翌年(二〇二二)一月三十一日として、翌日、会員で未投稿者への二次原稿募集案内(三三名)を送った。二〇二二年二月一五日を最終締切日として、あいつ総合印刷へ原稿を渡し、三月末日完成で詩集作製を依頼した。

二〇二二年二月二五日現在の世界情勢をみると、日本で開催された一年延期の「東京オリンピック二〇二〇」は二〇二一年七月二三日～八月八日(一七日間)「パラリンピック」は八月二四日～九月八日(一六日間)をコロナ禍の中、無観客試合で閉幕した。

米国大統領はトランプ(共和党)からバイデン(民主党)へと変わり、日本の首相は菅^{スガ}から岸田(共に自民党)へと変わった。二〇二二年二月四日～二月二〇日(一七日間)北京冬季オリンピックが開催された。西側諸国は中国の人種虐待や太平洋・インド洋の強権的侵出に抗議して、政治的ボイコットと

して首脳クラスは欠席した。唯一目立ったのがロシアのプーチン大統領で、習近平主席と首脳会談を行い、開会式に顔を出し帰国した。冬季オリンピックの閉会を待つて、二月二四日現地時間午前五時より、ロシアが隣国ウクライナへ武力侵攻を開始した。かつて、ウクライナの領土クリミア半島をロシアに併合すべく侵攻したのは二〇一四年であった。これらを見ても、北方四島返還の日口交渉など不可能であろう。

二〇一九年一二月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症(病名はCOVID-19 ^{コビッドナインティーン} 病原体名はSARS-CoV-2 ^{サーズコブツー}と命名)は一月武漢市で感染拡大し、一月二三日(四月八日まで六八日の都市封鎖を行った。一月に入り、EU諸国と米国に感染拡大した。WHOは一月三〇日に緊急事態宣言、三月一日にパンデミック宣言と対応は緩慢に見えた。習近平主席に付度したWHOテドロス事務局長の見返りなのだろう。

二〇一九年一二月八日～二〇二二年二月二五日現在までの二年二ヶ月(現在も全世界での感染拡大は継続中)世界全体の感染者数は四億三千万人、死者数は六百万人、死亡率1.4%、日本の感染者数は四百八〇万人、死者数は二万三千人、死亡率0.5%と死亡率は全世界の1/3であるが、日本における感染症に対する課題が種々提起されている。今回のパンデミックが収束するのは二〇二二年末頃で、スペイン風邪と同等度の三年越しの期間が推定される。スペイン風邪に次ぐ、経済的、人的大災害といえるであろう。

(伊藤俊晴)